

教会暦と聖書の流れ

マタイ福音書では、イエスが当時の指導者たちやファリサイ派を批判した「二人の息子」「ぶどう園と農夫」「婚宴」のたとえに続いて、この場面になります。マタイ21・45-46には「祭司長たちやファリサイ派の人々はこのたとえを聞いて、イエスが自分たちのことを言っておられると気づき、イエスを捕らえようとした」という言葉がありました。イエスと彼らの対立はもはや決定的となっていて、ここに登場するファリサイ派の人々は明らかな敵意をもってイエスに近づいて来ます。

福音のヒント

(1) 当時のパレスチナはローマ帝国の支配下にありました。ローマ帝国はユダヤ人の宗教的自由を認めながら、税を徴収することによって支配地域からの利益を得ようとしていました。しかし、ユダヤ人にとって徴税の問題はただ単に経済的な圧迫という問題ではなく、宗教的な信念の問題でした。「神が王である」と信じるなら、ローマ皇帝を王と認めることはできないし、そのローマ皇帝の徴税も認められないという考えが当時のユダヤ人にはありました。実際、イエスが生まれた頃、この問題のために反ローマ闘争も起きています。

(2) 「ファリサイ派」は律法を厳格に守ろうとしていた宗教熱心な人たちでしたから、皇帝への納税を原則的に認めるわけにはいきませんでした。しかしもちろん、現実には納税せざるをえなかったのです。一方の「ヘロデ派」は宗教的なグループではなく、政治的な一派です。ローマによって立てられたヘロデ王家を支持する人たちですから、納税を当然のことと考えていました。本来ファリサイ派とヘロデ派は相容れない立場でしたが、ここではその両者が一緒にイエスのもとに来ます。イエスが皇帝への納税を認めれば、ファリサイ派が「神に背く者」という理由でイエスを追及することができ、イエスが納税を認めなければ、ヘロデ派が「ローマ皇帝への反逆者」として訴えることができるのです(ルカ 23・2参照)。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです」(16節)。これは言葉遣いはていねいですが、実際には「いい加減な答はゆるさないぞ」という脅しです。

(3) イエスは納税のためのローマの銀貨を持ってこさせます。「デナリオン銀貨」にはローマ皇帝の肖像と銘が刻まれていました。その銘は「ティベリウス・カエサル・神聖なるアウグストゥスの子」というもので、ローマ皇帝は神格化されて



いました。

イスラエルの宗教は偶像崇拜禁止という点で徹底していましたから、このデナリオン銀貨は本来なら神殿に持ち込むことがゆるされないものでした。しかし、実際には誰もがその硬貨を使わざるを得なかったのです。実際にはデナリオン銀貨を持っていながら、納税の是非を議論している彼らの矛盾を指摘し、イエスは罨を巧みにすり抜けた、ということもできるでしょう。そもそも相手の議論はイエスを陥れるための議論なので、まともに答える必要はないとも言えます。

(4) 「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」とはどういう意味でしょうか。このイエスの言葉はあまりに短いので、さまざまな解釈の可能性があります。「イエスは政治と宗教の領域を分け、政治問題には関わらないようにされた」というのもその一つですが、このような考えはあまりにも近代的な考えで、古代ではおよそ考えられないことです。近代になってから「政治的領域」と「宗教的領域」を分ける考えが現れますが、それ以前は人間の現実すべてが神との関係の中にあつたのです。なお、人間の現実には何一つわたしたちの信仰と関係ないものはない、ということは現代の、第2ヴァティカン公会議以降のカトリック教会の姿勢でもあります(「現代世界憲章」第1項参照)。これは特定の政治権力と特定の宗教団体が結びつかないという意味での「政教分離の原則」とは別の問題です。

(5) 皇帝の像が刻まれたデナリオン銀貨は、皇帝のものと考えられていました。では神の像はどこに刻まれているか、それは「人間」だという考えもあります。創世記1・27に「神は御自分にかたどって人を創造された」とあるからです。つまり、イエスは「皇帝の像が刻まれた硬貨は皇帝に返せばよい。しかし、神の像が刻まれた人間は神に帰属するものであり、神以外の何者にも冒されてはならない」と言っているのではないか。興味深い解釈ですが、これが唯一の正しい解釈だという根拠は薄いと言わざるをえません。

(6) もしイエスが「皇帝のものは皇帝に」とだけ言ったのであれば、単純に皇帝への納税を認めたことになります。しかし「神のものは神に」と付け加えることによって、イエスはもっと根本的なことに人々の目を向けさせます。

ファリサイ派が問題にしたのは、人間の現実と無関係な神学的問題でした。彼らは自分たちも解決できない神学上の問題を持ち出してイエスを陥れようとしたのです。しかし、イエスは人間の現実の苦しみを忘れてそのような神学論争に没頭していたファリサイ派の姿勢を批判してきました。「納税問題が神の問題なのか？ 神の目から見て、本当に大切な問題はなんなのか」イエスはそう問いかけているのではないのでしょうか。「あなたは何を本当に神のもので、神に返すべきものだと思っているか」それは、わたしたち一人ひとりに向けられた問いだとも言えるでしょう。